

1 策定の趣旨

本圏域は、愛媛県の中核圏域として、経済、行政、教育・文化、コンベンションなどの都市機能をはじめ、松山空港やFAZ関連施設などの国際交流拠点が集積している。また、海や山の美しい自然に加え、松山城、道後温泉といった歴史文化遺産、伝統的工芸品に指定されている砥部焼や正岡子規に代表される俳句文化などが根付いている。加えて、瀬戸内海沿岸特有の温暖な気候条件に恵まれ、台風などの自然災害が少ないといった特徴のほか、5つの大学や3つの短期大学、多くの専修学校が集積するという財産を有している。

一方、全国的な人口減少の流れは本圏域でも例外ではなく、2005年頃から減り始めた本圏域の人口は、2015年に約64.6万人となり、2045年には17%減の53.5万人程度になると予想されている。それと同時に急激な少子高齢化に直面することが想定されており、地域コミュニティや生活基盤の崩壊などを招くことが懸念される。

そのため、人口減少・少子高齢社会にあっても、地域を活性化し経済を持続可能なものとするとともに、住民が安心して快適な暮らしを営んでいけるよう、中心都市である松山市と近隣市町（伊予市、東温市、久万高原町、松前町、砥部町）が連携中枢都市圏を形成し、松山圏域の目指すべき将来像とその実現に向けた具体的取組を示す「まつやま圏域未来共創ビジョン」を平成28（2016）年7月に策定した。

圏域市町は、「まつやま圏域未来共創ビジョン」に基づき、圏域の持続的発展とともに、広く地域の活性化に寄与することを目的に「圏域全体の経済成長のけん引」、「高次の都市機能の集積・強化」及び「圏域全体の生活関連機能サービスの向上」に関する具体的な事業に取り組んできた。各市町が連携することにより、個別に取り組むよりも効果的に事業を進めることができるとともに、各市町の持つリソースの有効活用などによる住民サービス向上や行政間の交流による業務の効率化、ノウハウ共有が進むなどの効果が得られたが、今後とも、それぞれの地域の特性を最大限に生かしながら、多様な主体と緊密に連携※1を図り、将来にわたって努力を続けなければならない。

また、現下のコロナ禍による影響を最小化するとともに、東京一極集中の脆弱性が明らかになる中で、感染リスクが低く、豊かな生活環境を持つ地方が見直されつつある動きを積極的に生かしていくほか、近年、注目されつつあるSDGsの考え方を取り入れ、持続可能で誰一人取り残さない魅力的で誇れる圏域をみんなで創り上げていく必要がある。

本ビジョンは、平成28（2016）年度に策定した「まつやま圏域未来共創ビジョン」に引き続き、連携中枢都市圏構想を進める様々な主体の共通の指針として、圏域の目指すべき将来像とその実現に向けた具体的取組を示す、第2期計画として策定する。

※1：連携 … 様々な主体に協力をいただいて具体的取組を実施していくこと

2 連携中枢都市圏の名称

本連携中枢都市圏の名称は、「松山圏域」とする。

3 計画期間

計画期間は、令和3（2021）年度から令和7（2025）年度までの5年間とする。

4 推進方策

(1) 推進体制

本ビジョンの推進に当たっては、「松山圏域連携協議会」の構成市町と具体的取組について協議・調整を行い、圏域の目指すべき将来像の実現に向けて着実に実施していくものとする。

具体的取組については、経済団体や教育機関などで構成する「松山圏域活性化戦略会議」や特定分野に関する調査研究・検討を行う「専門委員会」と意見交換を実施するとともに、協力を求めて進めていくものとする。

(2) 進行管理

本ビジョンに位置付けられた具体的取組の効果を検証するため、「圏域全体の経済成長のけん引」、「高次の都市機能の集積・強化」及び「圏域全体の生活関連機能サービスの向上」に関する成果指標（KPI:Key Performance Indicator）を設定し、進捗管理を行う。

また、実施した具体的取組については、松山圏域活性化戦略会議において、指標や各方面からの意見などを基に効果検証を行い、必要なアプローチやアクションの見直しをしていく。

5 連携中枢都市圏を形成するメリットについて

戦後の第1次ベビーブーム(1947年~1949年)の時に生まれた、いわゆる「団塊の世代」が、2025年には後期高齢者の年齢に達し、国民の4人に1人が75歳以上となる社会を迎えようとする中、医療や介護などの社会保障費は今後急増していくことが懸念されている。さらに2040年には、その子どもたち、いわゆる「団塊ジュニアの世代」も高齢化し、国民の3人に1人が65歳以上になるとされており、その社会はもう目の前に迫っている。

社会構造が変化しても、行政はタンカーのようにゆっくりとしか曲がれない宿命を持っており、時代の変遷や今後の変化を注視しながら対処していく必要がある。そこで、将来に備えるためのソリューションとなり道筋を開く端緒となるものが、この連携中枢都市圏の取組である。

現時点までの取組の中には、道半ばのものもあるが、今後、必要になると想定されるものも含め、将来の社会変化を念頭に意識して取り組む必要がある。

本ビジョンを策定するに当たって実施したアンケートでは、圏域住民が、生活の様々なシーンを圏域市町間で補完しあう、持ちつ持たれつのか関係をすでに構築していることが明らかとなり、また、高い定住意向を持っていることが読み取れた。一方で、人口減少に合わせ、行政もフルセット型から脱却し、今よりもさらに効率化していかなければ持続することができない時代が来ることが想定されている。

こうしたことから、松山圏域が人口減少・少子高齢社会の中にあっても各市町が連携し、行政を一層効率化しながら、引き続き、圏域の一体感を醸成していくことが圏域住民のQOL(生活の質)を守るとともに、持続可能な圏域を構築していくことになると考えられるため、以下のような観点から、行政が連携する価値を見出し、本圏域の取組を実行する。

■ 連携の強みが生まれる類型と松山圏域における取組

連携の強みが生まれる類型としては以下のようなものが挙げられる。これらの類型を踏まえて、連携の強みを生かした取組をさらに検討、実施していく。

【範囲のメリット】：強みを持ち寄り、それぞれの持つリソースやノウハウを活用する

- 大きさや特色の異なる自治体を、移住先として用意できる。
(取組事例：3市3町移住フェア出展)
- 四国カルストから瀬戸内海まで様々な自然や文化、アクティビティなどについて触れられることを生かし、地域ならではの体験をする校外活動(フィールドワーク)を通じて、若者目線でふるさとの魅力をPRする。
(これからの取組例：若者のふるさと体験を通じた誇りや愛着の醸成)

【規模のメリット】：圏域全体を1つの自治体と捉え、スケールメリットを働かせる

- 圏域全体で効率的に中堅・中小企業支援ができる。
(取組事例：中小企業販路開拓市開催)
- 医療圏(圏域)全体で24時間/365日の救急医療体制を維持する。
(取組事例：救急医療提供体制の維持)
- 通信指令センターや高額かつ使用頻度の低い特殊車両等を共用する。
(取組事例：圏域内消防機能の共同運用)

【密度のメリット】：圏域の中心地を使い、それぞれの利益や生産性を上げる

- 販売力、購買力の強い松山市中心部や観光地において、砥部焼や高原野菜など圏域の商品を集中的、戦略的に売ることができる。
(取組事例：「道後温泉」を軸とした観光振興)
(これからの検討例：地域商社の設立など)

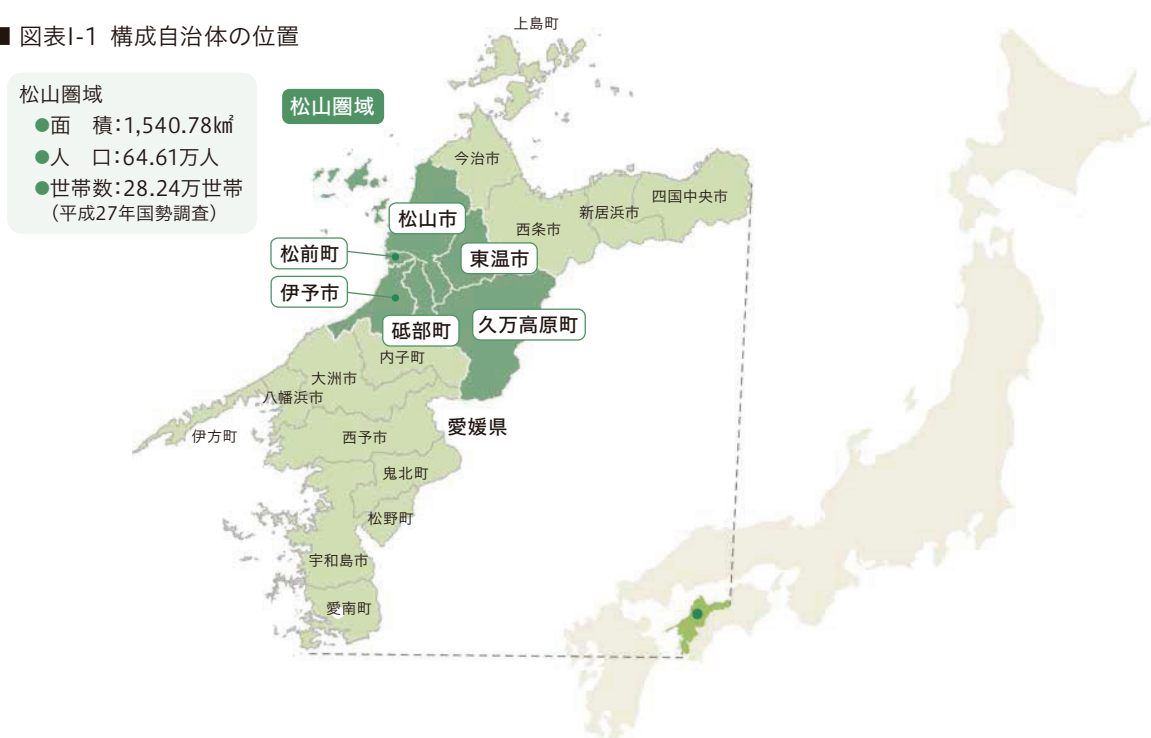
【集積のメリット】：地域の未来に投資できる産業を集積させる(産業クラスターなど)

- 四国の屋根から臨海地域、内陸部の平野まで、様々な立地条件を用意できる松山圏域の強みを生かすことができるため、今後、産業の強みや企業立地の対象などを研究し、まちのあり方や地域特化の経済を検討していく必要がある。
(これからの検討例：企業立地など)

6 構成自治体とその概要

松山市、伊予市、東温市、久万高原町、松前町、砥部町

■ 図表I-1 構成自治体の位置





Matsuyama-City

松山市

総合計画 将来像

人が集い 笑顔広がる幸せ実感都市
まつやま



松山城

 面積 (2020年)	429.35km ²
 人口 (2015年)	514,865人
 推計人口 (2045年)	439,316人
 合計特殊 出生率	1.44 ※P20参照 (2013～2017年ベイズ推定)
 高齢化率 (2015年)	25.0%
 市内総生産額 (2017年)	16,807億円
 小売吸引力 (2016年) ※P32参照	1.08

松山市には、400年以上の歴史を誇る松山城、3,000年前に湧き出たと言われ日本最古を誇る道後温泉があり、温暖な気候と海や山など豊かな自然に恵まれながら、古くから様々な文化が育まれ、熟成されてきた。特に俳句など

の分野では各時代の立役者となった文人、偉人を輩出し、その功績は今も「俳句甲子園」や「坊っちゃん文学賞」など様々な形で脈々と息づいている。



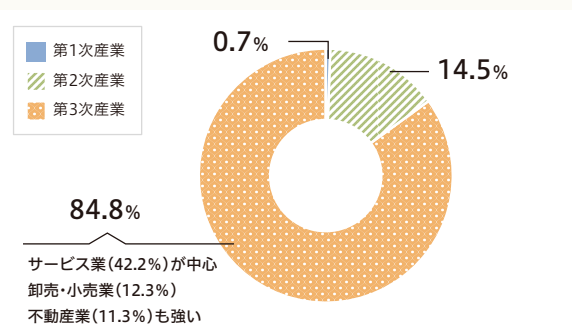
道後温泉本館



俳句甲子園



忽那諸島と瀬戸内の柑橘類





Iyo-City

伊予市

総合計画 将来像

まち・ひと とともに育ち輝く伊予市



IYO夢みらい館

 面積 (2020年)	194.44km ²
 人口 (2015年)	36,827人
 推計人口 (2045年)	26,467人
 合計特殊 出生率	1.40 (2013～2017年ベイズ推定)
 高齢化率 (2015年)	31.4%
 市内総生産額 (2017年)	1,090億円
 小売吸引力 (2016年)	0.76

伊予市は、地域資源である豊富な「食材」と料理に欠かせない出汁をはじめとした様々な「食文化」がある。削り節工場が立ち並ぶ一帯にはほのかに削り節の香りが漂う。また、瀬戸内海に面した夕やけこやけライン沿いにある

「ふたみシーサイド公園」や「JR下灘駅」は、夕日のスポットである。

「JR下灘駅」は一度は降りてみたい無人駅として有名で、さまざまなドラマのロケ地になっている。



JR南伊予駅

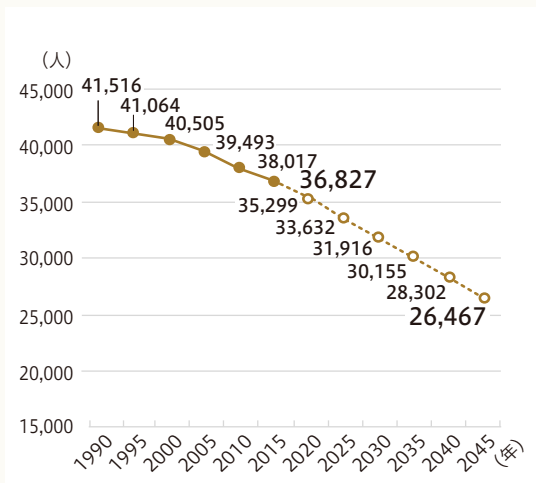


翠小学校の木造校舎

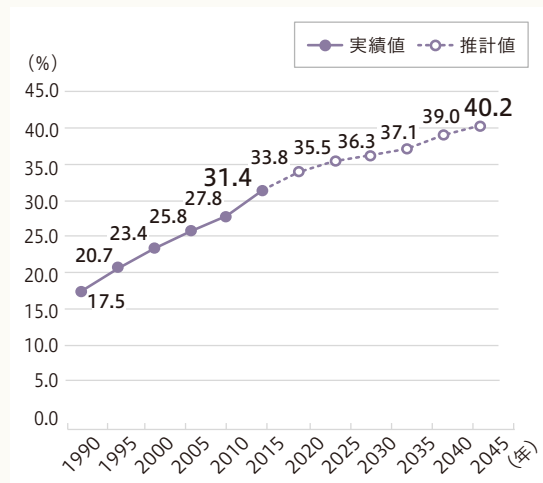


なかやまクラフトの里

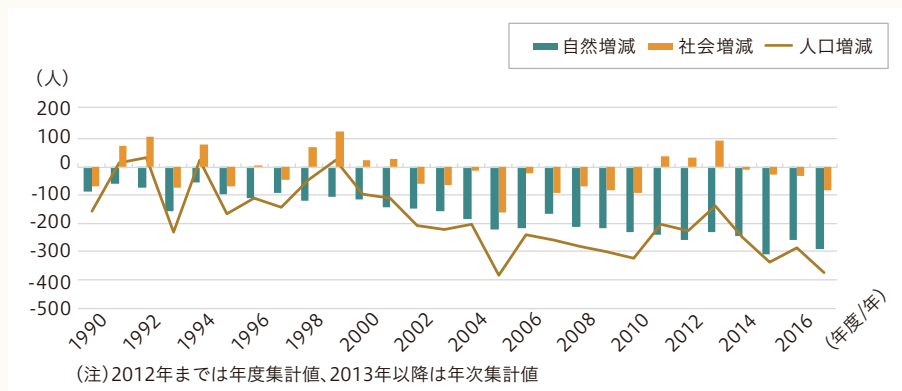
■伊予市の人口と将来人口の推移



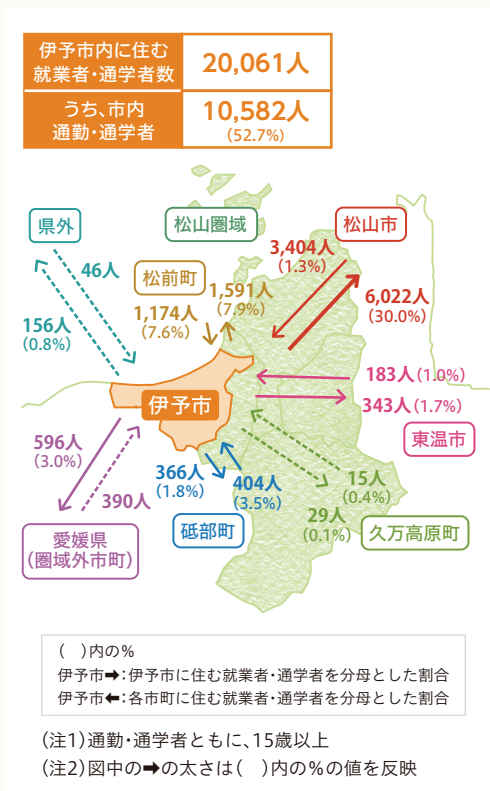
■伊予市の高齢化率の推移



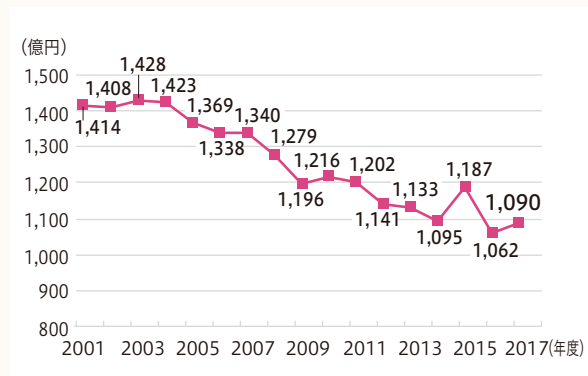
■伊予市の自然動態・社会動態の推移



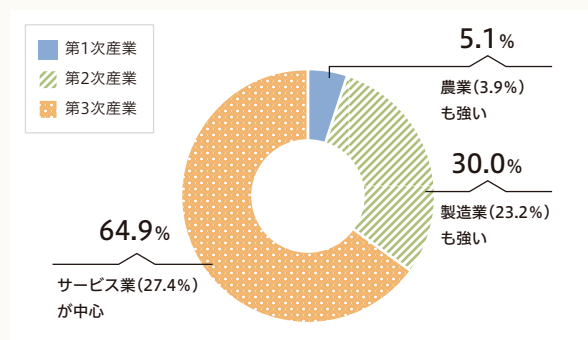
■伊予市への通勤・通学状況



■伊予市内の総生産額の推移



■伊予市の産業構造





Toon-City

東温市

総合計画 将来像

小さくてもキラリと光る
住んでみたい 住んでよかった 東温市



白猪の滝

東温市は、重信川が市の中央を流れ、潤い溢れる水辺空間に恵まれるとともに、石鎚山系に連なる皿ヶ峰や白猪の滝などの県立自然公園指定の景勝地を有し、豊かな自然と渓谷美にも恵まれている。

また、愛媛大学医学部を核に充実した医療・福祉の提供や利便性の高い交通網の整備

 面積 (2020年)	211.30km ²
 人口 (2015年)	34,613人
 推計人口 (2045年)	27,689人
 合計特殊 出生率	1.27 (2013～2017年ベイズ推定)
 高齢化率 (2015年)	27.5%
 市内総生産額 (2017年)	1,425億円
 小売吸引力 (2016年)	1.10

など、住みよい暮らしやすい環境が整っている。「舞台芸術の聖地」を目指す「アートヴィレッジとうおん構想」の核となる常設劇場「坊っちゃん劇場」や文化交流拠点施設「東温アートヴィレッジセンター」には、多くの観客や多種多様なアーティストが訪れる。



愛媛大学医学部附属病院

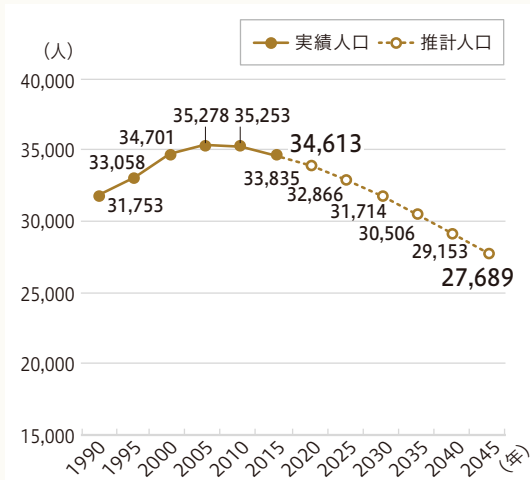


重信川サイクリングロード

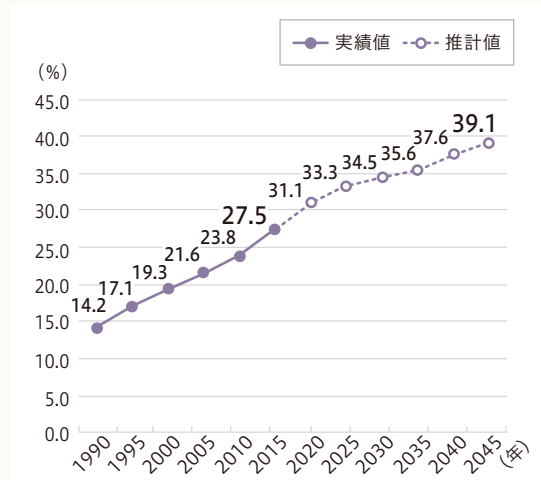


東温アートヴィレッジセンター

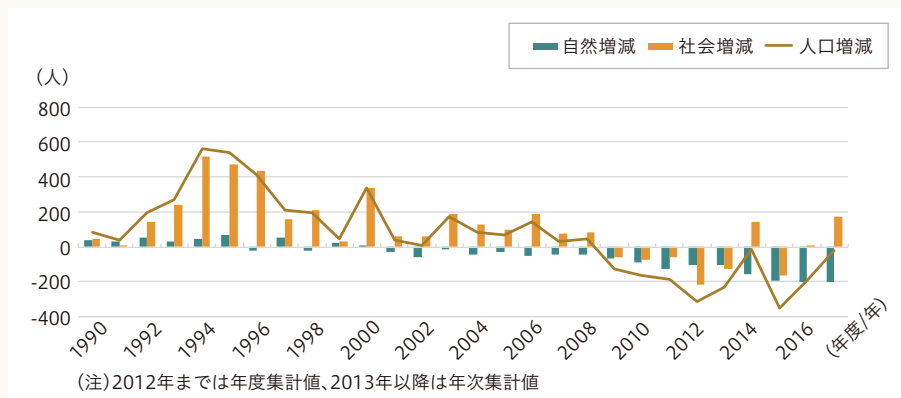
■東温市の人口と将来人口の推移



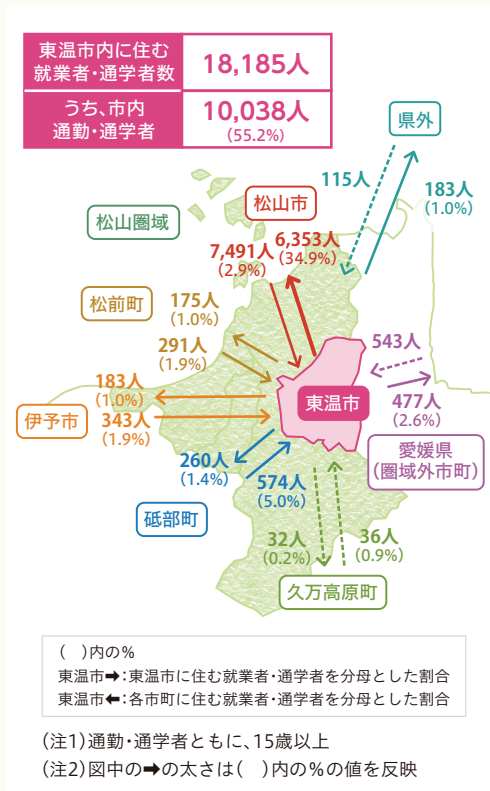
■東温市の高齢化率の推移



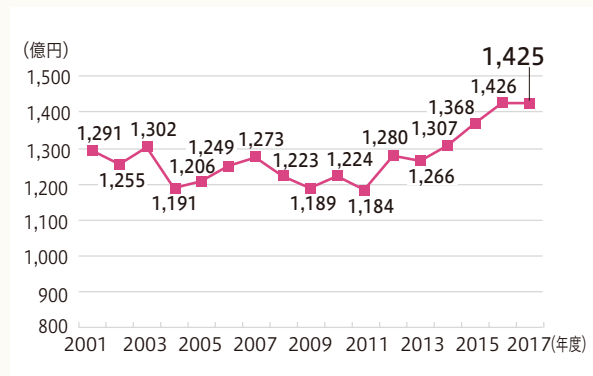
■東温市の自然動態・社会動態の推移



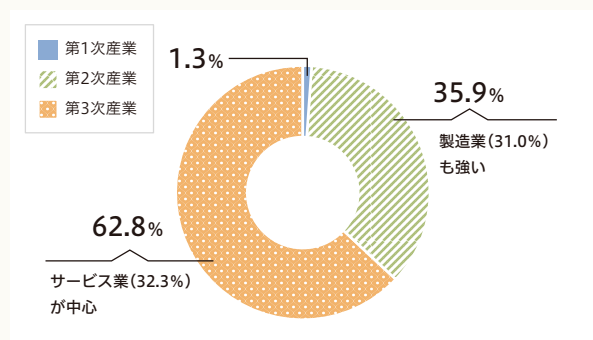
■東温市への通勤・通学状況



■東温市内の総生産額の推移



■東温市の産業構造





Kumakogen-Town

久万高原町



総合計画 将来像

ひと・里・森がふれあい ともに輝く 元気なまち
～ 地域が手を取りあい まちを次代へ ～



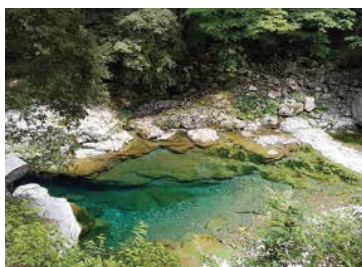
四国カルスト

 面積 (2020年)	583.69km ²
 人口 (2015年)	8,447人
 推計人口 (2045年)	3,176人
 合計特殊 出生率	1.60 (2013～2017年ベイズ推定)
 高齢化率 (2015年)	47.2%
 町内総生産額 (2017年)	295億円
 小売吸引力 (2016年)	0.49

久万高原町は、松山圏域において唯一中山間地域であり、人口減少と高齢化が進んでいるが、四国カルストや面河溪、石鎚山など豊富な観光資源に恵まれている。三坂道路を使えば松山平野からのアクセスも容易であり、

少し足を延ばせば日常と違った小旅行に。

また、久万高原町にある豊富な資源を生かした起業やまちづくりへのチャレンジを支援する取組や、光通信網整備に併せリビングシフトを検討する方々を迎える準備をしている。



面河溪(おもごけい)

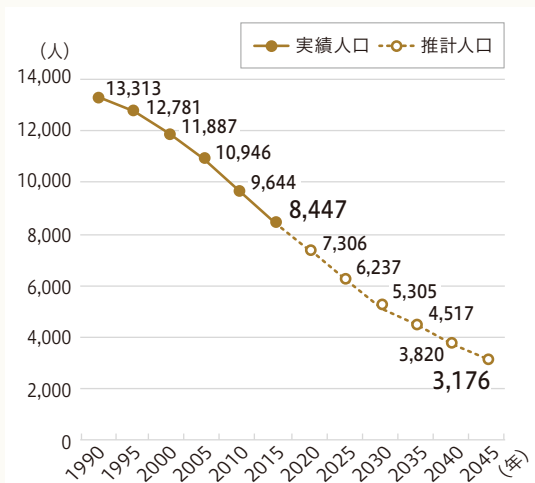


石鎚山

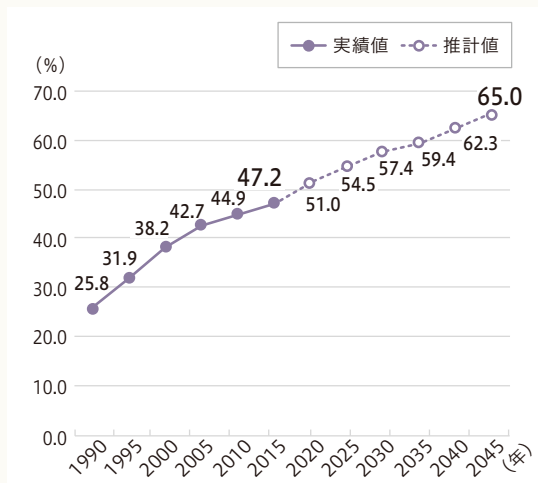


岩屋寺

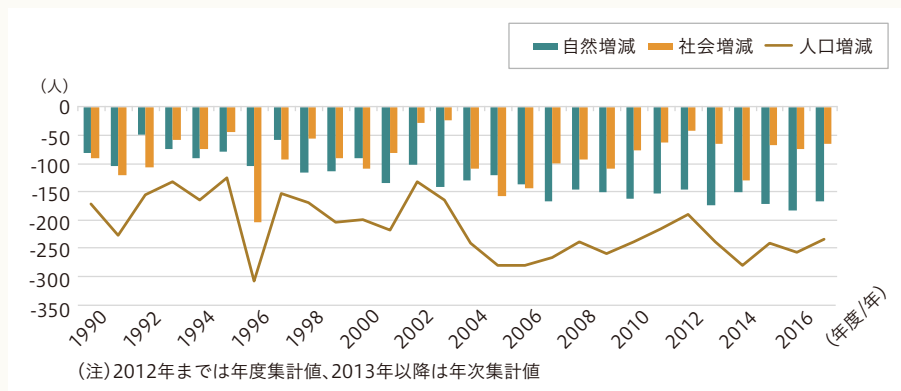
■久万高原町の人口と将来人口の推移



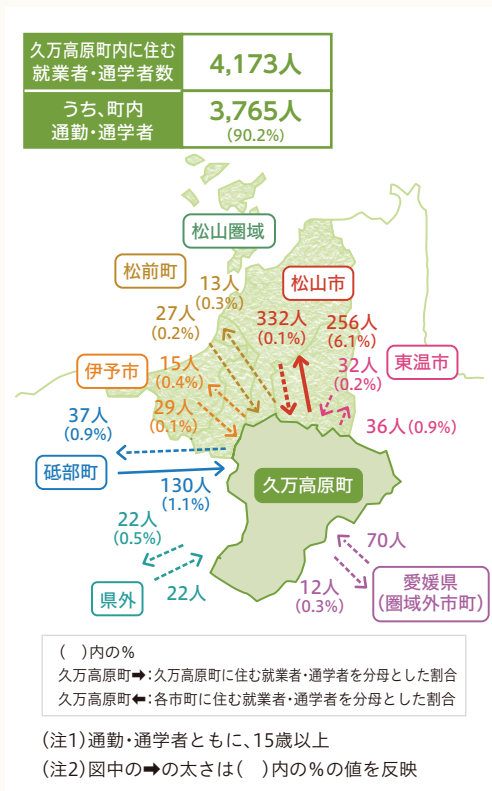
■久万高原町の高齢化率の推移



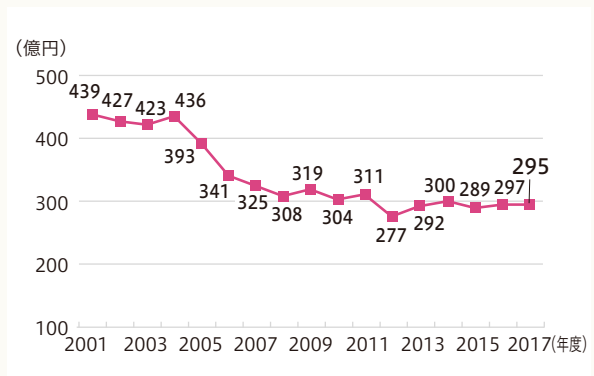
■久万高原町の自然動態・社会動態の推移



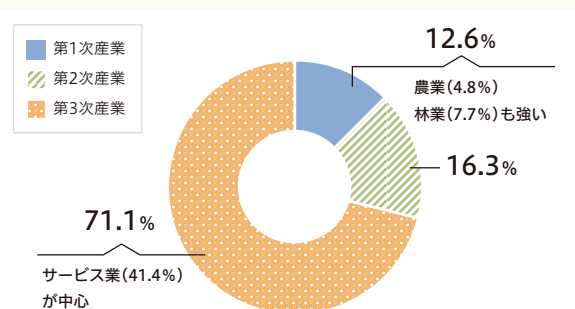
■久万高原町への通勤・通学状況



■久万高原町内の総生産額の推移



■久万高原町の産業構造





Masaki-Town

松前町

総合計画 将来像

生きる喜び あふれるまち まさき



ひまわり畑

 面積 (2020年)	20.41km ²
 人口 (2015年)	30,064人
 推計人口 (2045年)	24,165人
 合計特殊 出生率	1.40 (2013～2017年ベイズ推定)
 高齢化率 (2015年)	28.9%
 町内総生産額 (2017年)	1,053億円
 小売吸引力 (2016年)	1.54

松前町は、松山市に隣接する県内で最も小さい町だが、色々なものがコンパクトにぎゅっと詰まっている。空港・高速道路へのアクセスが良く、平地しかないため災害なども比較的少ないので、とても暮らしやすい町で、近年は大型商業施設エミフルMASAKIができたことにより、町外から多くの人々が訪れている。

町西側の海に近い部分では、昔から珍味製造が盛んで、町東側は一帯が農村地域になっており、穏やかな田園風景が広がる。この田園地帯では、「はだか麦」の生産が盛んで、令和2(2020)年度には「はだか麦」を使ったヘルシーおやつ「はだかむぎゅ」が誕生した。



エミフルMASAKI

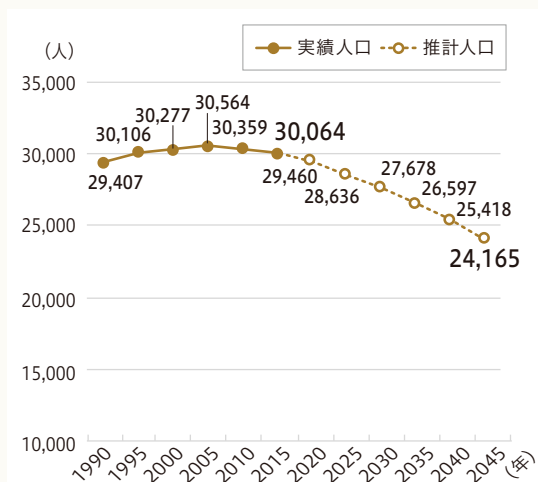


麦畑と青空

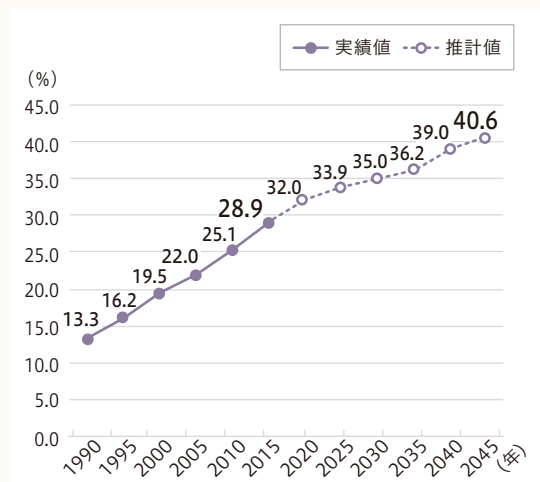


はだかむぎゅ

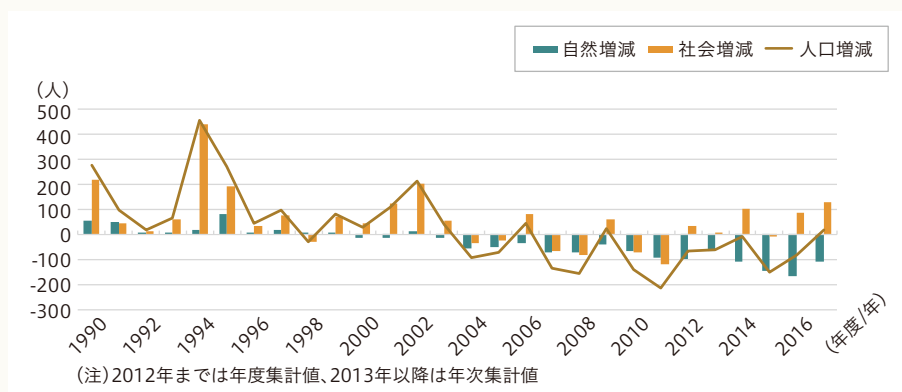
■松前町の人口と将来人口の推移



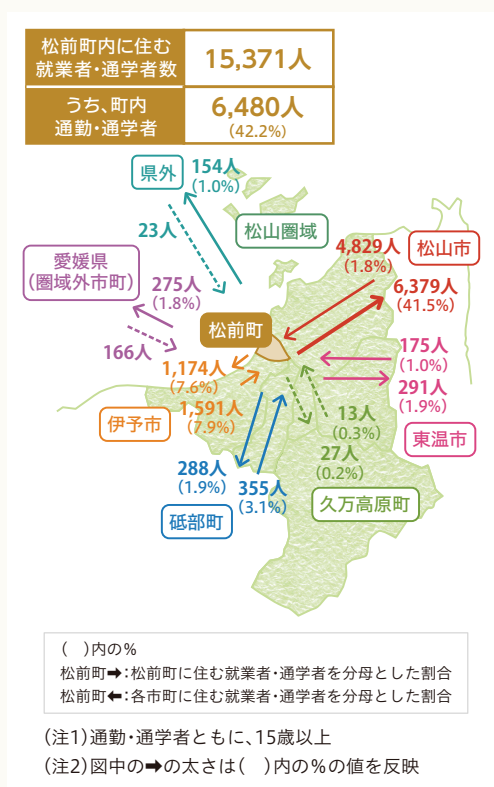
■松前町の高齢化率の推移



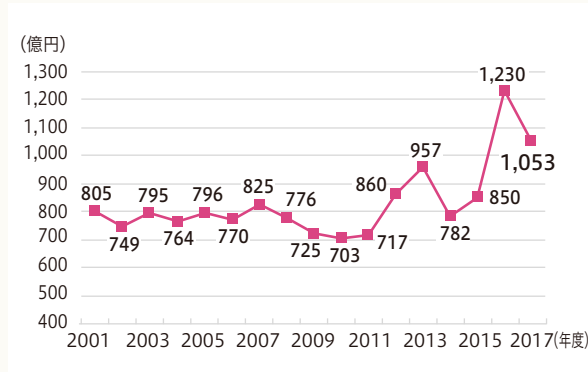
■松前町の自然動態・社会動態の推移



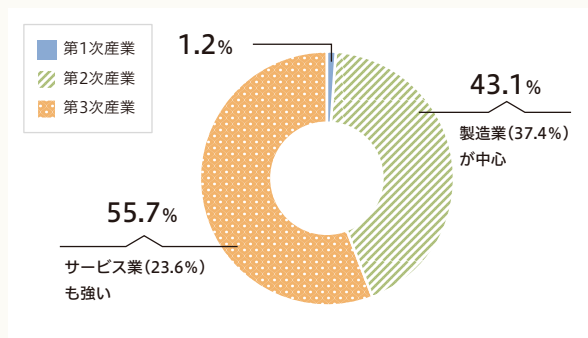
■松前町への通勤・通学状況



■松前町内の総生産額の推移



■松前町の産業構造





Tobe-Town

砥部町

総合計画 将来像

文化とところがふれあうまち



砥部焼

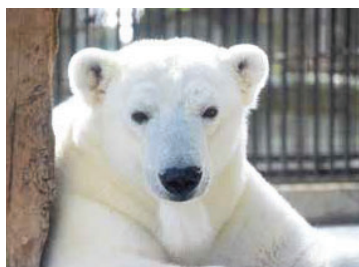
砥部町には、約240年の歴史を誇る、国の伝統的工芸品や県の無形文化財に指定されている砥部焼があり、清らかな白磁の肌に藍の絵模様、やや厚手の飾り気のない形や質の硬さに特色がある。また、砥部焼の歴史的資料

 面積 (2020年)	101.59km ²
 人口 (2015年)	21,239人
 推計人口 (2045年)	14,587人
 合計特殊 出生率	1.33 (2013～2017年ベイズ推定)
 高齢化率 (2015年)	29.8%
 町内総生産額 (2017年)	601億円
 小売吸引力 (2016年)	0.76

などが展示されている砥部焼伝統産業会館では、多彩な催しも行っている。その他にも、西日本屈指の規模を誇るとべ動物園や豊かな自然に囲まれたえひめこどもの城があり、年間約46万人の観光客を集めている。



砥部焼伝統産業会館

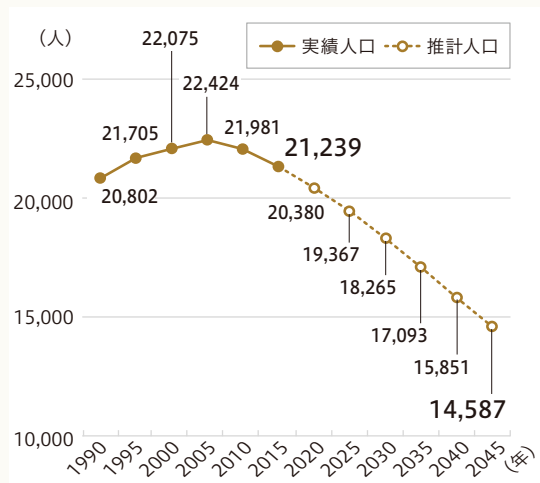


とべ動物園(ピース)

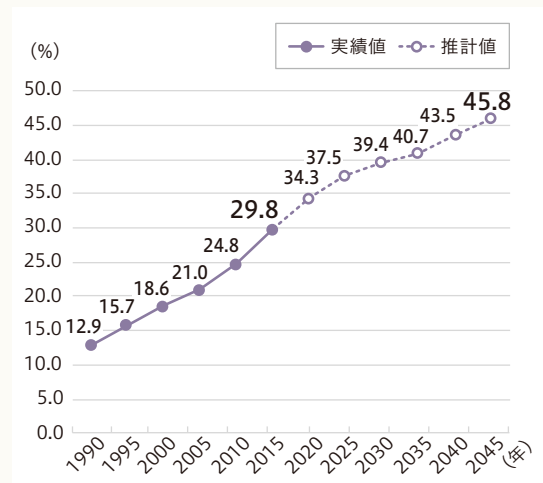


七折梅園

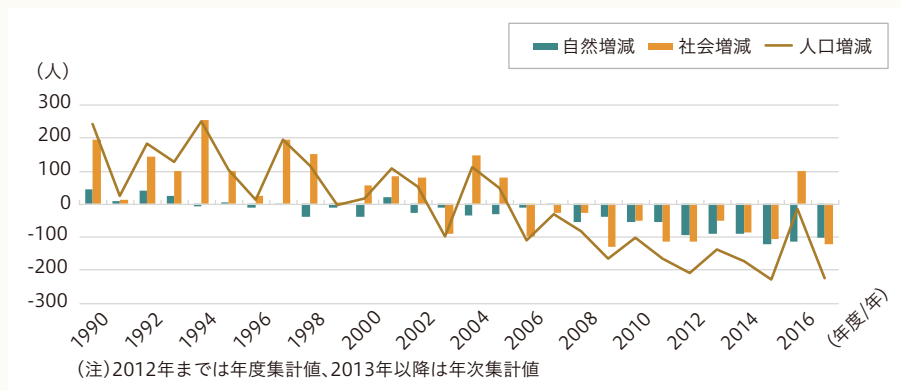
■砥部町の人口と将来人口の推移



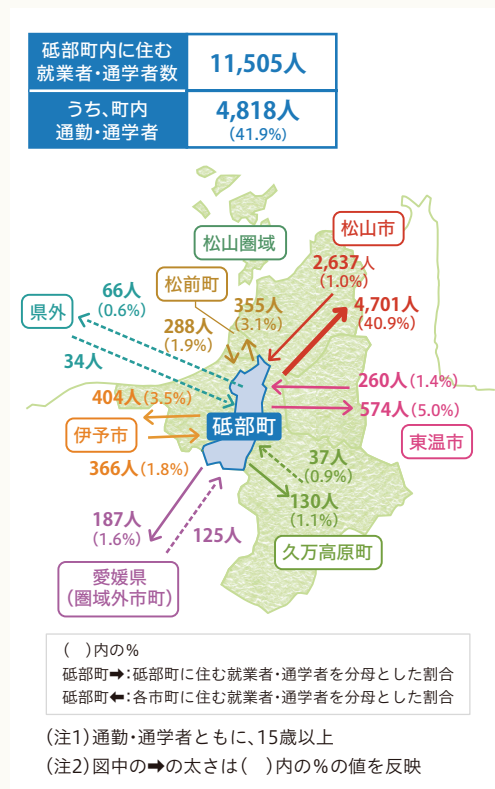
■砥部町の高齢化率の推移



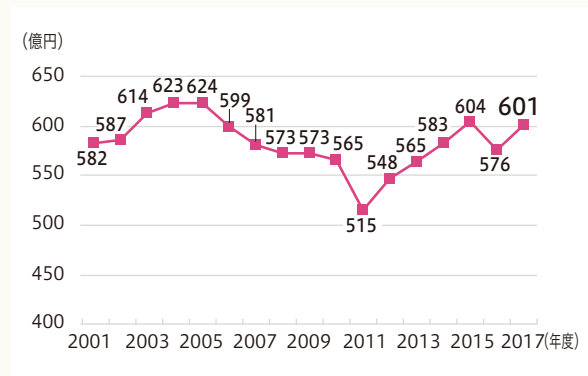
■砥部町の自然動態・社会動態の推移



■砥部町への通勤・通学状況



■砥部町内の総生産額の推移



■砥部町の産業構造

